

3年1組

この卵 食べる? 育てる? ～うこっけいさんとの暮らし～



この卵、どうしよう

2月、子どもたちは廊下で飼育しているうこっけいが交尾をしている姿を見つけました。調べてみると、有精卵が生まれる可能性があることが分かりました。「ひよこさんが生まれてほしい」「お母さんになるところを見てみたい」と期待する声が上がる一方で、「もうすぐ春休みだから、お母さんが卵を温め始めても見守れない」「命が生まれるなら、最後まで責任をもちたい」と心配する声も聞かれました。子どもたちは、自分たちにできることや命に対する責任について話し合いを重ねながら、うこっけいとの暮らしを見つめ直していきました。

そんなある日、うこっけいが2つの卵を産みました。小さな卵を前に、子どもたちの表情は真剣そのものでした。「育てたい」「食べるなんてかわいそう」「でも、このまま置いておいたら命を無駄にしてしまうかもしれない」「食べることで命を大事にしていないことなのかな」と、一人一人が自分の考えを語りました。どの意見にも「命を大切にしたい」という願いが込められていたからこそ、簡単には答えを出すことができませんでした。話し合いを重ねる中で、一人の子が「みんなでこんなに一生懸命考えて決めたことなら、命を大切にしていないはずがないよ」とつぶやきました。そして、子どもたちは、卵を食べることを決めました。

後日、卵を使って蒸しパンを作りました。卵を割る瞬間「ああ、割るの嫌だな」「緊張する」と言いながら卵が割れるところを見つめる子どももいました。そして、できあがった蒸しパン。一口食べると「おいしい」という喜びの声で溢れました。「こんなにおいしい蒸しパン食べたことないよ」という声も聞こえました。うこっけいさんに見せて「ありがとう。おいしいよ」と言う子どももいました。命をいただくことに正解はないこと、自分たちが考え続けることに意味があることを感じながら、一つの命と向き合う経験を積み重ねていきました。



4月になると、雌のうこっけいの海木(みき)さんが卵を温め始めました。ほとんど動かず、何日も卵を抱き続ける姿を見て「お母さんってすごい」「疲れなのかな」「安心して温められるようにしてあげたい」と、子どもたちの関心は自然と海木さんへ向かっていきます。「海木さんのために、自分たちにできることは何だろう」という問いから、仕切りを作ってほかのうこっけいが近づきすぎないようにしたり、座ったままでも食べやすい場所に餌を置いたり、止まり木や遊び場を工夫したりと、子どもたちは毎日の観察をもとに環境を整えていきました。世話をすることが目的ではなく「うこっけいにとって本当に必要なことは何か」を考えて行動する姿が少しずつ増えていきました。

そして4月27日。海木さんのおなかの下から、小さなひよこが姿を現しました。登校してきた子どもたちは次々に歓声を上げます。その後、3羽のひよこが無事に誕生しました。

「海木さんが羽を広げて守っている」「えさを口に運んで食べさせているよ」「赤ちゃんが迷子になると迎えに行っている」子どもたちは、小さな命のかわいらしさだけではなく、親鳥が命を守り、育てる姿を毎日観察する中で、お母さん鳥の強さや優しさにも目を向けるようになりました。「命が生まれるってすごい」「大きくなるまでには、こんなにたくさんのお世話が必要なんだね」命の誕生を喜ぶだけでなく、その命を育て続けることの大変さや尊さにも気づき始めていました。



命を守るために、自分たちにできること

3羽のひよこは、「空さん」「光さん」「さくらさん」と名付けられました。「空のように大きく羽ばたいてほしい」「みんなを明るく照らす存在になってほしい」「春に生まれたから、温かく育ててほしい」一つ一つの名前には、子どもたちの願いが込められています。名前が決まると、子どもたちの関わり方にも変化が見られました。「今日は空さんが一番元気だった」「光さんは羽の色が変わってきた」「さくらさんは高いところに乗れるようになったよ」と、毎日の小さな変化に気付き、教室中で伝え合う姿が見られるようになりました。観察カードには、姿や様子だけでなく、「どうしてこんな行動をしたのだろう」「今はどんな気持ちなのかな」と、自分なりの考えを書き加える子どもが増え、命を見つめる視点が少しずつ深まっていきました。

一方で、命と向き合う中では、喜びだけではなく悲しみも経験しました。海木さんが温め続けていた7つの卵のうち、4つは最後までかえることがありませんでした。「このまま土に返してあげたい」「でも、中で何が起きていたのか知りたい」「見たら悲しくなってしまう」子どもたちは何度も話し合いを重ねます。そして、「うこっけいファミリーと暮らしている私たちだからこそ、命の最後まで知ることも大切なのではないか」という考えから、一つの卵の中を確かめることにしました。そこには、生まれることができなかった小さな命がありました。教室は静まり返り、「あと少しだったんだね」「生まれてきてほしかった」「一生懸命生きようとしていたんだね」と、それぞれが命について考えていました。その後、子どもたちは手紙を書き、お墓をつくり、小さな命へ「ありがとう」の気持ちを伝えました。この出来事は、命は思いどおりにならないこと、だからこそ一日一日を大切にしたいという思いにつながっていききました。

うこっけいとの暮らしは、総合的な学習だけでなく、教科の学習にも広がっていききました。算数では「重さ」の学習で、実際に親鳥やひよこの体重を量りました。「空さんは何グラムかな」「海木さんと比べるとどれくらい違うだろう」と、教科書の問題を解くだけでなく、自分たちが毎日関わっているうこっけいに関わることを問題にしたことで、学んだことを生活の中で活用する姿が見られました。「大きくなったから重くなったんだ」「毎日見ているけれど、数字で見るともっと分かる」と、算数の学びと日々の生活が結び付いていききました。

ひよこたちの成長とともに、「この小屋では少し狭いね」「もっとのびのび暮らせる場所が必要だよ」という声が上がってようになりました。子どもたちは、田中ファームで広々と暮らすうこっけいの姿や、教室の外で気持ちよさそうに日なたぼっこをする様子を思い出しながら、「新しい家をつくろう」という目標を立てます。しかし、すぐに外へ移すのではなく、「イタチが来たらどうしよう」「鳥インフルエンザは大丈夫かな」と、命を守るために必要なことを一つ一つ調べ始めました。そして、「二重の金網にしよう」「地面から入れないようにレンガを敷こう」「雨の日も安心できる屋根が必要だね」と、安全に暮らせる小屋を目指して設計図を描き、何度も話し合いを重ねました。製作では、壁づくりや金網張りに苦戦しながらも、「ここは友達と協力した方がいい」「もう一本木を入れると丈夫になるよ」と知恵を出し合い、友達と力を合わせながら少しずつ形にしていきました。

7月には、お家の方や地域の方にもご協力いただき、小屋の組み立てを行いました。床を組み立て、柱を立て、壁を取り付けていくたびに「本当に家みたいだ」「早くうこっけいさんを入れてあげたい」と、子どもたちの期待は大きく膨らみます。これまで何か月もかけて考え続けてきたことが、一つの形になっていく喜びを感じるとともに、多くの人に支えられて命を守る環境ができたことへの感謝の気持ちも育まれていきました。完成した小屋で元気に過ごすうこっけいたちの姿を見ながら、「安心して暮らせそう」「これからも大切に育てていきたい」という声が自然と聞かれました。



「このたまご、食べる？育てる？」という問いから始まった子どもたちの学びは、「命をいただくこと」「命が生まれること」「命を育てること」、そして「命が安心して暮らせる環境をつくること」へと広がっていききました。子どもたちは、答えを教わるのではなく、うこっけいファミリーとの暮らしの中で問いをもち、仲間と対話を重ねながら、自分たちなりの答えを見つけ続けています。これからも、命と向き合う日々の学びを大切にしながら、子どもたちとともに新たな問いを見つけ、考え続けていきたいと思います。